

B. ロナガンの「歴史」理解からみた 「倫理的であること」のダイナミズム

島 村 絵里子

0. はじめに：ロナガンが生涯にわたって追及した「歴史」

本稿は、20世紀を代表するイエズス会のカナダ人のカトリック神学者・哲学者・方法論者¹・経済学者の一人として知られるバーナード・ロナガン (Bernard Lonergan, 1904-1984)² の思想について倫理的視点から解明する研究の序章を意図したものである。

ロナガンの思索の出発点にあるのは、カトリックの新スコラ神学の文脈の中で捉えられたアリストテレス・トマスの哲学・神学の伝統である。その中でも、ジョセフ・マレシャル (Joseph Marechal, 1878-1944)、同時代としてカール・ラーナー (Karl Rahner, 1904-1984) と並び、近代思想との対話の道を模索した超越論的トマス主義 (Transcendental Thomism³) に位置づけられている。

教会史全体の枠組みで捉えるならば、ロナガンは、第一バチカン公会議 (1869年-1870年)、第二バチカン公会議 (1962年-1965年) への応答を求められた世代に属する。ロナガンは、第一バチカン公会議後の神学の潮流に応える形で、近代主義・無神論に挑みつつ、教義理解の可能性を追求した。さらに、ヨーロッパ中心主義から脱し多様な文化との対話の必要性を打ち出した第二バチカン公会議に応えるため、従来のトマスの神学のパラダイムの方向転換を試みた。

ロナガンは、その時々教会の要請、そして思想的潮流に応える形で、認識論、神学における方法論、キリスト論、宗教、経済など多岐にわたるテーマについて論じている。代表作品として筆頭に上げられるのは、人間の認識のあり方について議論した *Insight*⁴ と、認識論に基づいた「超越論的」方法を土台として、神学的な営みの特徴を提示している *Method in Theology*⁵ である。ロナガンが取り組む様々な議論 (神学、哲学、経済) の中で、

¹ ロナガンは、晩年自らを「方法論者 Methodologist」と呼んでいる。ロナガンにとって、「方法」とは、問題を解決する為に詳細な決まり事、手順を意味するのではなく、人間の内面の内にはたらくダイナミズムそのものを意味している。Cf. Bernard Lonergan, ed. Elizabeth A. Morelli, Mark D. Morelli, *The Lonergan Reader* (University of Toronto Press, Toronto, 1997) p.14.

² ロナガンが主だった20世紀のカトリック神学者として紹介されているものとして、ファーガス・カー『二十世紀のカトリック神学-新スコラ主義から婚姻神秘主義へ』教文館2011年がある。

³ 19世紀末から20世紀前半にわたって、トマスを中心とした伝統的なカトリック神学と、カント以降の近代哲学との対話の試みを模索した神学者たちが、Transcendental Thomismと呼ばれている。ロナガンは、カント哲学から「Transcendental」という用語を受け継ぎ、あらゆる人間的営みの土台となる人間の本性的なはたらきを示す為に用いている。

⁴ Bernard Lonergan, *Insight: Study of Human Understanding*, vol.3 of *Collected Works of Bernard Lonergan*, ed. Frederick E. Crowe and Robert M. Doran (University of Toronto Press, Toronto, 1992)

⁵ Bernard Lonergan, *Method in Theology* (Herder and Herder, New York, 1972)

常に中心軸として据えられているのが、「一人の認識者そして行為者として、客観性・実在・真理・価値にどのように向かいあうべきか」という問いである。ロナガンは人間の内に働く意味と価値を求める志向性（内的促し）に従うことを根本的な人間のあるべき姿として捉える。ロナガンによる議論は、含蓄的にも明示的にもみな、認識という営みを構成するこれら一連の諸行為についての反省、「志向性分析（analysis of intentionality）」を前提としている。

ロナガンは現代思想との対話を通してアリストテレス・トマススの伝統を再解釈していくことにより自らの認識論を構築していったが、そのプロセスの中で特に注目したのが「歴史」についての取り組みである。ロナガンは「歴史」を主題とした著書を残してはいないものの、主著、また記事の中において「歴史」について度々含蓄的な形で論究している。「歴史」は、ロナガンが生涯をかけて追い求めた中心テーマの一つであり続けたゆえに、ロナガンの思想の独自性を理解する上で多くの示唆を含んでいると言える。

ロナガンは「歴史」という語によって示される意味を“history that is written”と“history that is written about”とに区別している⁶。前者は、歴史研究者が対象とする学問領域であり、後者はありとあらゆる人間の出来事の集積である。ロナガンは、*Method in Theology*の8,9章において、前者の意味での「歴史」探求を見据え、歴史探求についての方法的な反省を試みている⁷。そこで、どのように一人ひとりの歴史家そして歴史家集団（コミュニティ）が、歴史学の方法を精査し、理解を深めていくべきかに焦点を当て、過去の出来事の探求の過程とその方法論を検証している。

後者の意味での「歴史」とは、ありとあらゆる人間の出来事の連続の集積である⁸。ロ

⁶ Lonergan, *Method*, p.175. ロナガン自身は明言してはいないが、この二つの歴史の区分は、近代の歴史理解（GeschichteとHistorie）を念頭に置いていると思われる。

⁷ Lonergan, *Method*, p.293-353.

ロナガンは特に第二バチカン公会議以前に「教義の歴史性」の問題を中心的課題として追及し続けた。特に三位一体論、キリスト論、恩恵論が形成されていく歴史に注目し、分析を試みている。時系列的に見れば、ロナガン自身の教義史的な研究は*Method in Theology*で展開している八つの神学的専門領域を視野に入れて、いわば理論の適応という形でつくりあげられたものではなく、*Method in Theology*以前の枠組み、いわば教義理解＝神学というような未分化の状態で展開されたものである。*Method in Theology*の枠組みから見ればロナガンの教義学は「doctrines」、「systematics」という二つの専門領域を中心としたものであると言えるが、ロナガンが展開した神学は古いスコラ学の伝統の一部として今日、有意性をもたないものとして評価されることがある。しかしながら、一昔前の神学として一掃されるべきではないロナガン独自の観点がその古い神学のパラダイムの内で展開された神学の内にどのように織り込まれているかを検証する必要があると思われる。

Cf. Frederick E. Crowe, *Developing the Lonergan Legacy: Historical, Theoretical, and Existential Themes*, (Univ. of Toronto Press, Toronto, 2004), pp.78 -110. クロウはロナガンの二つの発言、「私の全ての取り組みはカトリック神学に歴史を取り入れることであった（“All my work has been introducing history into Catholic theology.”）」、「現代神学全体の問題は、プロテスタントにしる、カトリックにしる、歴史的な学識を導入することであった。（“The whole problem in modern theology, Protestant or Catholic, has been the introduction of historical scholarship.”）」の意味を明確にするために、ロナガンが生涯にわたってどのように教義神学を理解していったかを時代追って分析している。

⁸ Michael Shute, *The Origins of Lonergan's Notion of The Dialectic of History: A Study of Lonergan's Early Writings on History*, p.35.

ナガンは、この「歴史」を“Philosophy of History”⁹において「人間的発展の全域」を含み持つものであると表現している。この人間的発展には、個々人のみならず、共同体的次元が含まれている。そしてこの「発展」とは、個々人または共同体が遂行していった外的な行動に限られるものではなく、それらの行動を生み出す内的なプロセスも対象として含んでいる。この「歴史」理解では、個々人と共同体が、過去においてどのように意識（知性と意志）をはたらかせ、どのような意味と価値とを見出していったか、または見出すことに失敗したか、その過去のはたらき全体が現在の我々の意識のはたらかせ方にどのような影響を及ぼしているか、今現在のあり方は未来にどのような影響を及ぼしうるか、といった問いを立てることによって見出される人間の「ダイナミズム」に焦点を当てる。ここでは、「歴史」を、客観的な事実認識の対象としてではなく、一個人としてまた共同体として、参与し、形づくっていくものとして扱うこととなる。この「歴史」への取り組みの内に、「倫理的であること」ことが一つの課題として主題化されてくる¹⁰。

本稿では、この後者の意味での「歴史」理解に注目し、人間がこの世界で「倫理的である」ことのうちに見いだされる「歴史性」をどのように捉えうるかを、ロナガンの基本的な思想的枠組みを確認しつつ浮き彫りしていく。日本ではほとんど進んでいないロナガン思想研究の一つの足掛かりとなることを目指したい。そこでまず、ロナガンが自らの課題とする「歴史」の意味を確認する為に、ロナガンがどのように「意味領域」の区別に即して、「歴史」理解の三つの水準の発展を捉えているかを概観する。次に、この世界の現実を「進歩 progress」・「退廃 decline」・「贖い redemption」の緊張関係から成る歩みとして捉えるロナガンの歴史観の基本的な枠組みを確認する。最後に、この世界の歴史のダイナミズムを「下から上へ」・「上から下へ」という二つの方向性が会おう場として捉えることを通して、ロナガンがいかに様々な学究的営みを倫理的課題を含む探求のプロセスとして提示しようとしているかを検証する。これら三つの「歴史」理解の枠組みを通して、人間が、「倫理的である」ために、日々直面しなければならない問題と課題とをロナガンがどのように捉えているか示唆したい。

1. 意味領域の分化としての歴史理解の深まり

ロナガンは人間の「洞察する (insight)」というはたらきがもつ発展可能性に注目し、「理解する (knowing)」という行為を積み重ねることによって生じてくる四つの「意味領域」の区別とその段階的発展を捉えている。この文脈において、ロナガンは、自身が取り

⁹ Bernard Lonergan, “Philosophy of History”, Lecture given at Thomas More Institute, Montreal, 23 September 1960, p.12.

¹⁰ 近年、ロナガンの「歴史」理解と「倫理」との関係に注目が集まっている。主な先行研究として、Tad Dunne, *Doing Better: The Next Revolution in Ethics* (Marquette Univ. Pr. Milwaukee, 2010), Mark T. Miller, *The Quest for God & the Good Life: Lonergan's Theological Anthropology* (Catholic Univ. of America Pr., Washington D.C, 2013), Patrick H. Byrne, *The Ethics of Discernment: Lonergan's Foundations for Ethics* (Univ. of Toronto Pr. Toronto, 2017) がある。

組んだ「歴史」理解の課題がいかなるものであるかを明確化している。そこでまずロナガンが論じている「意味」についての基礎的理解を概観し、その前提をふまえ、「意味領域」の区別に即して、「歴史」理解の深まりをどのように段階的に捉えうるかを確認していく。

1.1. 「意味領域」の分化

ロナガンは、「意味 (meaning)」を求め続けるということを人間の根本的なあり方として捉えている¹¹。人は、単に自己保存のみを目的とした生物的レベルにおける存在者としてのあり方を遂行することのみに満足せず、自らの内に働く知的志向性によって、自己と自己を取り巻く世界を認識し、その認識した現実と関わっていく促しを受ける。個々人は、理解可能性に満ちた世界において、主体の間主観性 (inter-subjectivity)、シンボル (symbols)、言語 (languages)、生き方の結実 (deeds) 通して、他者の意味を理解し、他者に意味を伝達し、他者と意味を共有することにより、意味世界を構築していく可能性に開かれている¹²。個々人は、この促しに応え、自らの経験について問いを発し、その問いへの答えを概念化し、その認識を媒介として積極的に、この世界の現実と関わっていくことにより、意味を構築していくプロセスに自ら参入していく¹³。

人間の「歴史」理解の最初の一步は、自己の感覚経験を中心とした「直接性の世界 (world of immediacy)」から「意味によって媒介された世界 (world mediated by meaning)」への移行として捉えられる。

ロナガンの文脈において、「意味」とは、知るという行為 (経験、理解、判断という一連の行為) を経て得られる内容である。宗教、芸術、言語、文学、科学、哲学、などは「意味」を求める行為として、人間社会と文化を構成する内在的な要素として理解される。換言すれば、「意味によって媒介された世界」の構成要因は、この世界のうちにある理解可能性を探索しつづける個々人の内面のはたらき、つまり個々人の多様な意識のはたらき¹⁴である。このように、互いに個々人が協力しあい、個々の意味領域を多様に分化され展開されることによって、社会制度や文化が形作られ、さらに伝統として、次の世代に伝えられ、「歴史」が形成されていく。つまり「意味によって媒介された世界」、換言すれば「意味世界」は、世代を超えて共同体において共有され、構築され、発展していくものである。

¹¹ Lonergan, *Method*, pxi, Cf. Lonergan, *Method* pp.57-99.

¹² ロナガンは「意味世界」において自覚的に認識し行動する主体を、「受肉した意味 (Incarnate Meaning)」と呼んでいる。Cf. Lonergan, *Method*, p.73.

¹³ Lonergan, *Method*, pp104-105. 意味によって媒介された世界への構築へ個々の主体が参与することは、事実と価値と愛へという三つの自己を超え出る契機 (認識的・道徳的・宗教的自己超越) という観点からも捉えることが可能である。

¹⁴ ロナガンは「意識の多型性 (polymorphism of consciousness)」という表現により、意識のあり方は個々人によって異なる為、典型的な意識というものには存在しないと主張する。個々人の意識において、意味領域が分化していくということは、人が人として存在すること自体の多元性的性格の本来的な現実化であると言える。個々人の意識のあり方のこのような唯一無比性は、その意識の主体のみが遂行しうるその人自身の自由と責任のあらわれでもある。Cf. Lonergan, *Method*, p.268-275,330. Lonergan, "Unity and Plurality," *A Third Collection*, (Paulist Press, New York, 1985), p.250.

1.2. 意味領域の発展の諸段階から捉えられた「歴史」理解

「意味によって媒介された世界」は、意味領域の分化という長いプロセスを通して徐々に、世代を超えて発展していく¹⁵。ロナガンは認識のプロセスを積み重ねることによって開拓される「常識」・「理論」・「内面性」・「超越」という四つの意味領域を手がかりに歴史理解の深まりのプロセスを描いている¹⁶。以下、ロナガンがどのように「歴史」理解の深まりを三つの水準を上げていく軌跡として捉えているか、その中でロナガンは自分自身の「歴史」へのかかわりをどのように位置づけているかを概観したい¹⁷。

(1) 神話の時代 (the age of myth)

第一の「歴史」理解の水準 (the first plateau) を、ロナガンは「神話の時代」と呼び、「常識の意味領域」を中心とした理解の段階として捉えている¹⁸。

「常識の意味領域」は、人が他者と生きていく為に、最も基本的なもの・不可欠なものとして位置づけられる。そこでは、ある特定の文脈 (時代・地域・文化) の中で展開されるその時々で日常生活で共有される意味に焦点が当てられる。その特徴とは、我々と物事の関わり (things to us) という観点のみが、種々の問題が主題化されるという点にある。つまり常識の意味領域で求められるものは、特定の集団において、人々が共に円滑に生きていく為に、「今」求められる了解事項の集合体である。ゆえに、その都度、その集団で共有されている語彙は、その中で通じるもの、当たり前のもので運用されることのみが重要となり、その語彙が示しうる普遍的な物事のあり方についての反省はなされない。

西洋思想の大枠で捉えるならば、ソクラテス以前の時代がここに含まれる。この段階で、歴史の動きはシンボリックに捉えられる。この世界の創造と運命ということを中心としている前哲学的な宇宙論的な神話に代表されるように、歴史のながれは、運命、宿命、神の摂理によって象徴化された形で把握されるが、その内実を理論的に吟味することはない¹⁹。

(2) 理論の時代 (the age of theory)

第二の「歴史」理解の水準 (the second plateau) を、ロナガンは「理論の時代」と呼び、「常識の意味領域」を超えた「理論の意味領域」を中心とした「歴史」理解の展開の場として位置づけている。

¹⁵ Lonergan, *Method*, pp.85-99, "Dimensions of Meanings" Collection, vol. 4 in Collected Works of Bernard Lonergan, ed. Frederick E. Crowe and Robert M. Doran (University of Toronto Press, Toronto, 1988).

¹⁶ Lonergan, *Method*, pp.81-85 ロナガンは四つの意味領域に加え、「学識の意味領域 (the realm of scholarship)」と「芸術の意味領域 (the realm of art)」に言及している。本論では、「歴史」理解の中でロナガンが足掛かりとしている四つの意味領域の分化との関係に焦点を当てたため、この二つの意味領域には触れていないが、特に「学識の意味領域」は歴史学的研究を展開する上で基礎となる意味領域である。

¹⁷ Shute, *The Origins of Lonergan's Notion of The Dialectic of History*, pp.1-8.

¹⁸ Lonergan, *Method*, p.83.

¹⁹ B.Lonergan, "Natural Right and Historical Mindedness", *A Third Collection*, (Paulist Press, New York, 1985), pp.176-177.

人は、日々の生活を効率的に遂行することに集中する常識の意味領域に安住することに満足せず、「組織的な内的必然性 (the systematic exigence)」に動かされ、「私」・「我々」とのかかわりで捉える世界観を超え、現実世界そのものが有している理解可能性を問うという促しを受ける。そこで主題化されるのは、「物事と物事との関係 (thing to thing)」を突き詰めていくということ、つまり物事の普遍的なあり方を概念的に整理し、個々の洞察を全体へと体系的に関係付けていく作業である。この意味領域が開拓され展開されることにより、自然科学と人文科学の区別、さらにそれぞれ中の分野において主題が分節化され、この世界の諸理解可能性が多様な観点から浮き彫りにされていく。常識の意味領域に留まり、その領域を唯一の意味領域であると捉えることから一歩進み出て、常識を常識として捉え、他の意味領域と出会い開拓していくこのプロセスは、「未分化の意識 (undifferentiated consciousness)」から、「分化された意識 (differentiated consciousness)」への進展として捉えられる²⁰。

「歴史」理解という観点からみるならば、それは慣習的な枠組みを超えて、組織的に、思弁的に物事を捉えようとする営みを展開する段階である。古代ギリシアにおいて、人間の魂の働きが主題化されることにより、理論の意味領域の展開がなされた。そのギリシア哲学の影響を受け、展開された中世のスコラ的な形而上学の発展は、理論的な意味領域が開拓によってもたらされたものであり、その実りとして神学とその神学を支える哲学の諸概念は組織的かつ論理的に整理されていった。この意味領域の展開の他の事例として、アウグスティヌスの『神の国』、ヘーゲルによる弁証法的な「歴史」理解、マルクスの唯物史観、ドイツの歴史学派などが挙げられている²¹。

特に近世以降、論理的に、批判的に歴史を分析するという観点が現れる。ロナガンはそこに第三の「歴史」理解の水準で展開される方法論的な観点への移行の萌芽を見出している。しかしながら彼はとりわけ、啓蒙主義以降の歴史哲学を不適切な「実践 (praxis)²²」として批判している。第一に、その世俗的在り方が問題視される。それらが、キリスト教が見据える歴史の目標に対抗する形で台頭してきたこと、なによりもロナガンが不可欠と考えている宗教的な要素を排除している点が問題視される。第二に、それらの「歴史」理解が、人間的発展と退廃との間の緊張関係に目を向けていない点が挙げられる。自由主義が人間の「退廃」の事実に向けず、自己目的的な技術発展を通して、多大な進歩をもたらすことが出来ると見なす傾向があり、マルクス主義が、階級闘争を基盤として据え、歴

²⁰ Lonergan, *Method*, p.272.

²¹ ロナガンが展開する三つの「水準」は具体的な歴史の進展（ソクラテス以前、近代、等）と対応はしているが、特に「(2) 理論の時代」には古代から近代前夜にいたるまでの思想史的にみて多くの時代が含まれており、極端に長くバランスを欠いているように見えるかもしれない。しかしながら、この区分は、「歴史」理解の思想史の変遷を追う通常の「歴史区分」を意図したのではなく、ロナガン独特の「理解」概念にもとづいたものであることをお断りしておく。

²² Shute, *The Origins of Lonergan's Notion of The Dialectic of History*, p.7. シュートは、ロナガンの「praxis」と「poiesis」という二つの語の用い方の区別に注目している。後者は、技術的やノウハウによって導かれるものづくりを意味する。前者は、実践的な知恵に導かれ、自由と責任にもとづく熟慮と選択によってもたらされるものであるとする。Cf. B.Lonergan, *A Third Collection*, pp. 184-85.

史の前進を批判している。このような第二の水準から第三の水準へ向かう際に見いだされる限界をいかに乗り越えることが出来るかという問題をロナガンは、自らの課題をして据えた²³。

(3) 内面性の時代 (the age of interiority)

第三の「歴史」理解の水準 (the third plateau) を、ロナガンは「内面性の時代」と呼び、そこでは「内面性の意味領域 (realm of interiority)」および「超越の意味領域 (the realm of transcendence)」によって「歴史」理解が深められていく。これは、人間の内面性の「反省」に基づいて展開される「歴史の弁証法」を自覚的に引き受ける段階である。この水準で、ロナガンがいかにしてより包括的な歴史理解を展開しようとしているかを、この水準の機動力となる「批判的な内的必然性」、「方法論的な内的必然性」、「超越的な内的必然性」という三つの内的な促しに即して確認したい。

「内面性の時代」の展開の基軸に据えられるのが、「内面性の意味領域」である。この意味領域は、まず「批判的な内的必然性 (the critical exigence)」に動かされ開拓されていくものである。そこで、認識する主体が内的に求めていること自体が主題化され、知性によって得られた知識と意志によって受諾された価値を認めることへと進む。つまり、物事を本当に知るといことがいかなることか、認識の対象を知る為に展開される諸作用とその諸作用がどのような規範的かつダイナミックな構造を有しているか、その認識の構造自体を支える妥当性が追及される。

さらに、「方法論的な内的必然性 (the methodical exigence)」により、まず諸意味領域の相互関係が主題化される。そこで同一の対象についての多様な理解可能性の見出し方が区別されていく。それぞれの分野に相応しい方法を用いるということの反省をさらに進め、そもそも色々な方法を用いる自己の知的な活動自体がいかなるものであるかが問われる。

「内面性の意味領域」で展開される「歴史」理解において、経験科学と歴史的意識が重要性を持つようになる。そこで「西洋の古典的な文化を永遠のものであるという前提に立ち、その文化を原理・原則として土台に据え、他の文化を評価していく」という「演繹的な」道筋の限界が明らかにされる。この限界を乗り越えるべく、特定の文化ではなく、全ての人間に共通の内面のはたらきのダイナミズム自体を土台に据え、経験的に歴史の歩みを見定めていくことへと向かう。

そこでロナガンは、自らの認識のはたらきを振り返り、その経験を理解し肯定するとい

²³ Lonergan, *Method*, p.301.

ロナガンは、“The Absence of God in Modern Culture” という論文において、西洋のキリスト教社会の世俗化の原因の分析を試みている。現代社会の文化の上位構造 *superstructure* における神の不在の原因として、世界における人間の自律性の主張、人間による社会の秩序と自然の支配、個々人の人権と責任についての新しい意味づけという問題を挙げている。このような社会の世俗化の中で、神学は、宗教学、現代科学に基づく人間理解、宗教的言明の非神話化、現象学や実存主義といった現代哲学、教会の伝統の相対化という問題と向かい合う必要があると言う。Cf. B.Lonergan, “The Absence of God in Modern Culture” *A Second Collection*, (Univ. of Toronto Press, Toronto, 1996), pp.101-134.

う反省的なプロセスを経て達する「自己同化 (self-appropriation)」²⁴を媒介してもたらされる「一般化された経験的方法 The generalized empirical method)」²⁵を明確化し、それに基づいて明示化された認知理論、認識論、形而上学を基礎に据えて²⁶、歴史を理解することが、第一、第二の「歴史」理解の水準が有する限界を克服するものであると理解する。

人間の内面性のはたらきを理解し、肯定すること（自己同化）は、様々な意味領域を適切に分節する為の基礎となる。ロナガンによれば、人間は、本性において哲学的にまた抽象的に知られるのみならず、その歴史性において歴史のかつ具体的にも知られる必要がある²⁷。換言すれば、「歴史」理解は、普遍的な「人間本性」のみならず、「歴史性 (historicity)」をも説明できるものではないからではない。「歴史性」とは、文化をはじめ常に人間の営みが、時間・場所・空間を舞台にダイナミックに展開し続けていくもの、変わりゆくものであることを意味している。

さらにロナガンにとって、人間理解、歴史理解は神理解と切り離しえないものである。人間が営む「知る」という行為と「行う」という行為は、単に静的な意味で、真・善・美を希求するのではなく、それは「歴史」という舞台で動的つまり「歴史的」に展開されていくものである。そしてその「歴史」は単なる際限がない時間の継続ではなく、終末的な完成という目的をもったものである。

そこでロナガンは「内面性の時代」の「歴史」理解の為に不可欠のものとして、「超越的な内的必然性 (the transcendent exigence)」を位置づけている。この内的な促しによって、人間はこの世界を超えた現実を求めることへと駆り立てられる²⁸。そこでは、全ての意識の働きが究極的に拠る所とすべきもの（「究極的な意味と価値」としての神）が中心に据えられる。ロナガンはこの「超越の意味領域」こそ、マルクス、ヘーゲルの提示した「歴史」理解の限界を超え、真に「歴史」理解を構築していく基盤であると捉えている。つまり人間の「歴史」は、本来希求すべきものを希求しない非本来的なあり方から、人間

²⁴ Cf. Lonergan, *Insight*, pp.343-371.

²⁵ Cf. Lonergan, *Method*, pp.3-25.

²⁶ Lonergan, "Natural Right and Historical Mindedness", p.177. ロナガンは、*Insight*において形而上学を一つの学問（科学的探究）として定義づけている。またそこでロナガンが主題化している「歴史」も、方法論と探求の進め方自体、その目的に向かう為の手続き（進め方）を明確にすることを求めているがゆえに一つの学問として理解しうるものであると述べている。ロナガンが展開している歴史における発見的構造は、つまり後天的に書かれた歴史に依存せず、ア・プリオリな歴史のダイナミズムの特徴を浮き彫りにすることを目指す。しかしそのア・プリオリな探求はそれ自体を目的とするのではなく、「後天的」な具体的な出来事の展開（歴史）を識別することへと向かう。Cf. Shute, *The Origins of Lonergan's Notion of the Dialectic of History*, p.35. Lonergan, *Insight*, chapter XVI "Metaphysics as Science."

²⁷ *Ibid.*p.179.

²⁸ 一方で、「超越の意味領域」が開かれる契機となるのは、上からののはたらきであり、この「超越の意味領域」が他の意味領域を支えていると言える。他方、意味領域の分化をもたらす諸内的必然性は、究極的に超越の意味領域を目指しているとも理解しうる。このように、意味領域の分化のプロセスにおいても「下から上へ」と向かうダイナミズムと「上から下へ」と向かうダイナミズムとの間の緊張関係が見られる。

が本来持っている可能性に再び開かれ実現していくのみならず、人間本性を超えた完成へと導かれる歩みとして捉えられている²⁹。

2. 歴史の弁証法：「進歩 progress」・「退廃 decline」・「贖い redemption」

ロナガンが理想とする「内面性の時代」において展開される「歴史」理解は、近代の哲学的な「歴史」理解とキリスト教的な「救済史的」パラダイムとが統合されたものであると言える。ここで、ロナガンがこの「歴史」理解の枠組みで追及していった弁証法的なダイナミズムを確認していきたい。ロナガンは、この世界の「歴史」の実際のあゆみを、「進歩 Progress・退廃 Decline・贖い Redemption」という三つの弁証法的な緊張として捉えようとしている。この試みは、ロナガンが生涯を通して持ち続けた関心の一つである³⁰。そしてこれはロナガン自身が「歴史」理解の第三の段階での反省から導き出した見一つの裏りでもある。

「進歩」・「退廃」・「贖い」という弁証法的枠組みは、歴史的なプロセスの方向性を予測するために措定された三つの近接（the three approximations）であり、それらは各々以下の三つの問いかけに答えることによって得られるものである³¹。

第一に「進歩」は、「もし本来の志向的意識のはたらきを促す「超越論的命法（transcendental precepts）」³²」、具体的には、“Be attentive（注意深くあれ）”、“Be intelligent（知性的であれ）”、“Be reasonable（理性的であれ）”、“Be responsible（責任的であれ）”、“Be in love（愛の内にとどまれ）”という内的な五つの呼びかけに対し、人間がすべての場面で応えていたならば、その「歴史」はどのようなものとして実現していったであろうか」という問いに対して答えることによって近づきうるものである。

第二に、「退廃」は「超越論的命法を順守しなかったことによって、人間の「歴史」はどのように変化したか」ということを考察することによって導きだされる。

第三に、「どのように、第一の本来の行い（進歩）と第二の非本来の行い（退廃）の両方が入り交ざった歴史的状況を、本来性の促しに即した調和へと戻すことができるか」という問いへの応答として「贖い」が理解される。

そこで「進歩」・「退廃」・「贖い」というこの弁証法的な「歴史」理解の枠組みを手掛かりとし、「歴史」の中で個として倫理的であることと、共同体として倫理的であることが、どのように互に関係しあっているかということを観望したい。

²⁹ ロナガンが本来的であると据える「超越の意味領域」における「歴史」理解は、ある意味でキリスト教的な終末理解を見据えている。しかしながら、ここでは特定の宗教に制度的に属するかどうかではなく、何よりも人間の本来の発展可能性が基軸に据えられている。

³⁰ ロナガンがこの考え方の枠組みを最初に提示したのは、“Pantōn Anakephalaiosis”と名付けられたロナガンの学生時代の小論文においてである。そこでロナガンは知性の歴史的な発展における三重の弁証法（threefold dialectic）として①事実の弁証法、②罪の弁証法、③思想の弁証法に言及している。Cf. Crowe S.J., Frederick E., *Christ and History: The Christology of Bernard Lonergan from 1935 to 1982* (Lonergan Studies), p.13.

³¹ Shutte, *The Origins of Lonergan's Notion of The Dialectic of History*, pp.37-38.

³² Lonergan, *Method*, p.20.

(1) 「進歩 (progress)」

人は、この世界において、この世界内にある理解可能性を認識していく為に、より良く知る (Knowing better) という課題を、そしてこの世界の内にある可能性としての善を常により十全なかたちで実現していく為に「より良く行動する Doing Better」という課題を引き受けるよう求められている。共同体として、人類としての「歴史」の中で、個々人としての「歴史」がこの認知的な活動、善の実現として展開されていく。その推進力となるのが、個々人の内に働く志向性、「知りたいという純粋な欲求 (The pure desire to know)」 「真の善への純粋な欲求 (A pure desire for genuine good)」である。これらの志向性に促され、この世界の内にある「真理」を肯定し、「価値」へ参与する。「真理」と「価値」を求めるプロセスは、「経験」、「理解」、「事実判断」、「価値判断」、「信仰」という五つのレベルから成るものとして理解されている³³。この五つのレベルの各段階は、それぞれ「経験に注意を向けよ (Be attentive)」、「経験の内にある理解可能性を把握せよ (Be intelligent)」 「理性に従って理解の正しさを見極めよ (Be reasonable)」 「現実の世界に責任ある応答をせよ (Be responsible)」、「愛の内に留まりなさい (Be in love)」という、認識の構造に即した「内的呼びかけ」としての「超越論的命法」として捉えることができる³⁴。この内的呼びかけは、歴史的・社会的・文化的条件の相違に関わらず、すべての人間の内面に等しく刻まれている。この内側から呼びかけに従い、各自が置かれた状況の中で、経験を深め、理解を積み重ね、判断力を養い、より慎重な決断を積み重ね、さらに信仰を深めていく時、人は個としてまた共同体として、多様な意味領域を豊かに深めるのみならず、「人間的善 (the human good)」を実現していくこととなる。

(2) 「退廃 (decline)」

人間は本来、個としてまた共同体の一員として、自らの内にある志向性に導かれ、この世界内にあらゆる理解可能性を探り「意味によって媒介された世界」を構築していくよう内的な促しを受け続けている。しかしながら人間は常に私欲私利を求める非本来的な傾きにさらされている。つまり自己中心的な傾きにより、自分の利益にとって不利になるものには注意を向けず、自分にとって都合の悪い状況をあぶりだす可能性のある問いを避け、現実をありのままに肯定すること避け、責任から逃れ、敵・味方の枠組みでこの世界を捉えるといった状態へと陥る危険に常に向かいあっている³⁵。ロナガンは、このような非本来的な傾きを「利己的洞察逃避 (individual bias)」、「ドラマティックな洞察逃避 (dramatic bias)」、「集团的洞察逃避 (group bias)」、「一般的洞察逃避 (general bias)」に分類してい

³³ Cf. Bernard Lonergan, "Cognitional Structure", Collection, vol. 3 of The Collected Works of Bernard Lonergan, (University of Toronto Press, Toronto, 1988) pp. 205-221.

³⁴ Lonergan, *Method*, p.53.

³⁵ Lonergan, *Insight*, pp.244-250. ロナガンは、「ドラマティックな洞察逃避」を、前意識的なはたらきが、意識のうちに生じる洞察の助けとなるイメージが出てくることを妨げるものとして捉えている。この洞察逃避により、個々人は、共同体における他者とのかわり方で要となる常識の領域で支障をきたすことになる。

る³⁶。ここでは特に「歴史」弁証法的な展開において問題となる、「利己的洞察逃避」、「集团的洞察逃避」、「一般的洞察逃避」の特徴を確認したい。

「利己的洞察逃避」は、他者との意味と価値の共有の可能性を排除する。個々人が自らの生命的価値のみを追従した場合、自己の欲求を満たすことが絶対的な目標となり、他者との共生を目指した社会的秩序、文化的な秩序を構築していくことが困難となる。

「集团的洞察逃避」は、特定の集団によって利益を得る社会制度を構築し維持することを目標に据える。その時、一つの文化を一つの道具（イデオロギー）として用い、非本来的な社会秩序を助長する危険性がある。例えば、この集团的な洞察逃避は、より多く所有すること、より多く消費することに意味と価値をおくことによって、社会において競争が生じ、不正義を助長することになるのではないかという問いを意識的に回避し、自分たちの集団が有利に働くようにする。この洞察逃避は、自己利益のみを追求する集団どうしの対立によって、各々の短期的な（shorter cycle）退廃を招く。

「一般的洞察逃避」は、常識を常識と捉えず、絶対的なものとみなすところに問題がある。例えば、文化は常に変わり行くもの、修正されていくべきものであるにも関わらず、特定の文化を絶対化する傾向がある³⁷。この洞察逃避は、長期的な（longer cycle）退廃を招く。

(3) 「贖い (redemption)」

人間には「回心 (conversions)」による本来性への回復の道が残されている。ロナガンは、回心を「退廃」のサイクルに陥ってしまった「歴史」の流れを軌道修正していく原動力として捉えている。回心は個々人の内面で起きることであるが、共同体の次元を含み持つものである。共同体的回心が、他者との協働によって実現する本来的な弁証法的な歴史的な人間の活動の実現の基礎となる。この回心のはたらきが及ぶ範囲は、人間が意味と価値を求める契機となる「知性のはたらき」、「意志のはたらき」、「超越的次元とのかかわり」である。そこで回心は「知的回心 (intellectual conversion)」、「道徳的回心 (moral conversion)」、「宗教的回心 (religious conversion)」に分節化されて捉えられる³⁸。ロナガンは、これら三つの回心を経ることにより、意味と価値を本来のあるべき「歴史」のダイナミズムに即して追求することが可能となると言う。

「知的回心」により、人は、“本来的に”知るという営み、つまり意味と価値を志向する認識の歩みの意味と価値を自覚的に受諾し、遂行するようになる³⁹。知的回心を遂げるこ

³⁶ 「bias」という語は、一般的には「偏見」、「バイアス」と訳されるが、ロナガン独自の用い方がなされており、ロナガンの著作の邦訳においても定訳がない。本稿では、比較的多数の研究者が意味内容を反映させる形で用いている「洞察逃避」という訳語を採用した。

³⁷ Lonergan, *Insight*, pp.261-263.

³⁸ Lonergan, *Method*, pp.237-244.

³⁹ 知的回心は、認識的自己超越による水平的な認知的 (cognitional) な活動の広がりとは異なり、個々の認識的自己超越における知性 (intellect) の働きの根本的な変革である。ロナガンの意味する知的回心を厳密な意味で捉えるならば、哲学的に自己の認識の行為の有り方を反省することを通して、実在性の基準を明確に把握し、肯定することを意味する。それは認識者の自己同化 (self-appropriation of knower) として捉えられる。Cf. Lonergan, *Insight*, pp.343.

とにより、知るという行為が、経験、理解、事実判断のいずれかのみで成り立つのではなく、この三つのレベルを通してはじめて完成されるということを肯定し、この一連のプロセスを自覚的に歩むよう努めることとなる。

「**道徳的回心**」により、価値の判断基準が根本的に変えられる。この回心によって、個々の場面においてどのようなことをすべきかどうかについての決断と選択を迫られた時、自己の満足が得られるかどうかということではなく、自己の欲求を超えたところにある正しさを基準とする態勢が揺るがないものとなる。つまりこの回心を経験したい人は、自由と責任をもって、他者と共生することによって実現される秩序の善の構築の歴史のプロセスへの参与を自らの使命として引き受けるようになる。

「**宗教的回心**」によって、人は自らが、超越的存在とのかかわりにあること、つまり「神の愛の内にある存在 (being in love with God)」であるということを経験し、現実として意識的に受け入れる。つまりこの世界内で日々遂行する意味と価値を求めるといふ営み自体が、究極的な意味と価値を求めるといふこと、そしてそのプロセス全体が無制約な愛である神自身のうちに抱かれているということとして受け止められる。換言すれば、この世界の内にいる理解可能性を求め、善を実現していくといふ全ての行為が、神との交わり深めていく営みに向けられるべきであるといふことが絶対的な事実として肯定される。

知的回心（実在性の規準の肯定）、道徳的回心（諸価値への参与）、宗教的回心（究極的な意味と価値の受諾）というこの一連の回心は、個人の意味と価値を求めるといふ姿勢自体が決定的に変革される実存的な出来事である。しかしこれらの回心が呼び起こされるきっかけ、そしてこれらの回心が及ぼす影響は共同体的な次元を有する。意味と価値を求めていく歴史のプロセスは共同体の中で行われる。認識的に、道徳的に、そして宗教的に自己超越していく個人は、意味と価値を求めていくことを通して、他者との関わり、この有限な世界との関わりを求める。この個人の内なる自己超越のはたらきを持つ解放性は、他者が有する本来性への傾きが開花するよう触発する。本来の個人の内なる成長は、個人の内なる地平の広がりをもたらしのみならず、他者の回心への促しとして、共同体的次元へと影響を及ぼす。このような回心の共同体的次元が歴史を本来のものへと軌道修正することを可能とする。

3. 「歴史」における「下からの」ベクトルと「上からの」ベクトル

ロナガンが「内面性の意味領域」の理解をもとに展開した「歴史」理解の枠組みには、先の弁証法的な枠組みに加え、「下からの」ベクトルと「上からの」ベクトルの緊張関係がある。「歴史」の中に常に働いているこの二つのベクトルの中で捉えられる人間の倫理的課題を、まず具体的な出来事としての「下の刃 (the lower blade)」と具体的な出来事を理解するための発見的構造としての「上の刃 (the upper blade)」との関係、次に、「下から」のはたらきとしての「創造 (Creating)」と「上から」のはたらき「いやし (Healing)」の関係、最後に「媒介する神学」と「媒介された神学」の関係という三つの観点から捉える可能性を検討していきたい。

3.1. 「下の刃」と「上の刃」：「歴史」理解の二つの契機

この世界において意味と価値を求めていく歩みは、過去・現在・未来を含み持つ歴史のダイナミズムの中で、世代を超えて展開していく。ロナガンは、「歴史的意識 (Historical Consciousness・Historical Mindedness)」という旗印のもと、人間の意味と価値を求める知性と意志の営みのダイナミズムを捉えている。先述の通り、人間が絶えずより完全なものを目指して営む「知る」という行為と「行う」という行為は、単に静的な意味で(時空を凌駕した状態で)真・善・美を希求することを意味するのではなく、それは「歴史」という舞台上常に動的かつ具体的に展開されていくものである。そこでロナガンは、「本性」を見出そうとする従来のアリストテレス的な原理探求のみならず、経験から出発し、試行錯誤の内に洞察を積み重ねていく「下から上へのアプローチ (“from below upward”）」の必要性を主張している⁴⁰。

「歴史は、現在のカテゴリーを過去に投影するのではなく、歴史的探求が人間の知性なしに遂行されるように振る舞うことでもなく、その中間の道を進むことができる。この中間の道は、時間と場所を捨象し、あらゆる歴史的データの可能な組み合わせを統合することを可能とするような「ア・プリオリなスキーム (a priori scheme)」によって遂行される。それはちょうど、数学の科学が、あらゆる量的な現象のあらゆる可能な組み合わせを総合することが出来るように包括的なスキームを構築するようなものである。」⁴¹

ロナガンは「歴史」理解に導入すべき科学的なアプローチを、はさみの「下の刃 (the lower blade)」と「上の刃 (the upper blade)」との機能の喩えを用いて説明している⁴²。「下の刃」は、実際に具体的に生じた出来事、生じている出来事(データ)であり、「上の刃」は、調査を方向付ける諸原理である。科学の探求は、データのみでも、抽象的な原理のみでも成り立たず、両者が不可欠である。

歴史哲学が目指すものは、このたとえで言うならば、「上の刃」の特徴を明確にすること、つまり、自然科学がデータの内に法則を見出す努力をするように、具体的な「歴史」の展開の根底にあるア・プリオリな道筋(何が歴史たらしめているかを問うこと)であると言える。

3.2. 「下から」のはたらきとしての「Creating」と「上から」のはたらき「Healing」

ロナガンは、“Healing and Creating in History”という論文において、人間の意味と価値を見出す志向性のうちに、人間がこの世界で可能性を現実のものとしてく「下から上へ (from below upwards)」と人間の歩みを根本から引き揚げていく「上から下へ (from above downwards)」という二つのベクトルの緊張関係を捉えている⁴³。

⁴⁰ B. Lonergan, “Natural Right and Historical Mindedness”, pp.169-183.

⁴¹ Shutte, B. Lonergan, *Grace and Freedom: Operative Grace in the Thought of St. Thomas Aquinas*, Vol. 1 of Collected Works of Bernard Lonergan, ed., Frederick E. Crowe, Robert M. Doran (University of Toronto Press, Toronto, 2000) p.156.

⁴² B.Lonergan, *Philosophy of Education*, (Toronto: Univ. of Toronto Press, 1993), p. 342. Cf.Shutte, *The Origins of Lonergan's Notion of The Dialectic of History*, p36.

⁴³ B. Lonergan, “Healing and Creating in History,” *A Third Collection* (Paulist Press, New York,1985), pp.100-109.

「下から」の歩みは「創造性」を開花させていく営みである。つまり人間の内にある欲求がこの世界の感覚経験・意識の経験から出発し、この世界の内にある理解可能性を把握し、この世界のうちある可能性を開花させていく⁴⁴。他方、「上から」の歩みを導くものは「愛」による「いやし」である。「上から」のはたらきにおいて「家族間の愛、自分の属する民族・町・国への人間的な愛、人を神の宇宙に方向付け、祈りにおいて自らを表現する神的愛」⁴⁵が推進力となる。

ロナガンは、「上から」の「いやし」のプロセスを、信仰、希望、愛という対神徳を引き合いにしつつ、以下のように要約している。

「人間理性をイデオロギーに捕らえられた人々から解放するのは、プロパガンダでもなく議論でもなく宗教的信仰である。社会的退廃の抑圧に抵抗することを可能とするのは、人間の約束ではなく、宗教的希望である。もし激情が静められるべきであり、また不正が激化し、無視され、単に弁護されるべきではなく、認識されかつ取り除かれなければならないとするのならば、そこで、宗教的愛徳、苦しむ僕の愛徳、自己犠牲的な愛が、人間的所有と人間的なプライドに取って変わるべきである。」⁴⁶

このようにロナガンの「歴史」理解においては、単に「理論の意味領域」のみならず、「内面性の意味領域」、さらには「超越の意味領域」も含まれている。つまり歴史哲学的理解において、認識の構造についての反省（自己同化（self-appropriation）および宗教的回心が不可欠であるということが主張されている。

前節にて「贖い（redemption）」のプロセスの中で回心が果たす役割を位置づけたが、さらに回心を「創造」と「いやし」という二つのベクトルから捉えることが出来る。一方で、回心は人間が「下から」、つまりこの世界にある様々な理解可能性を把握していくことによって超越的な存在へと向かう知的志向性の本来的な開花を目指した歩みである。つまり知的回心と道徳回心は宗教的回心へと至るプロセスとして理解される。つまり実在性の基準を肯定するのみならず、その実在性を価値として捉え参与することへと促すという意味で、道徳的回心は知的回心を止揚する。そしてこの世界における価値への関与が究極的に超越的存在（神）への参与へ向けられているという意味で、宗教的回心は道徳的回心を止揚すると言える。

他方、回心は上から超越的存在が与える人間の癒しのプロセスとして理解される。つまり宗教的回心は、道徳的回心（道徳的自己超越）と知的回心（認識的自己超越）を支え、導くものとして位置づけられる。宗教的回心を経た主体は、言語化以前ではあるが、究極的に目指すべきものを恩恵によって既に捉えており、その体験を基盤として、知的回心が目指す究極的意味、そして道徳的回心が目指す究極的価値を把握し肯定することへと促される。

⁴⁴ MUHIGIRWA F. RUSEMBUKA, *The Two Ways of Human development According to B. LONERGAN Anticipation in Insight* (EDITRICE PONTIFICIA UNIVERSITA GREGORIANA Roma 2001), p.29.

⁴⁵ Lonergan, "Creativity, Healing in history", p.106. Cf. Rusembuka, *The Two Ways of Human Development*, p.82.

⁴⁶ B.Lonergan, *Method*, p117. Cf. Crowe, *Christ and History*, p.189.

3.3. 「下から」の「媒介する神学」と「上から」の「媒介された神学」

「下から」の人間の活動と、その活動を本来的なものへと立ち返させる「上から」の働き
の緊張という枠組みからロナガンは神学という営みを様々な分野へと分節化し統合する
試みをしている。ロナガンの提示する「神学における方法」の内に、個人が他者との知
的な協働の中で、どのように「歴史」における「Creating」と「Healing」のダイナミズ
ムに参与しているかを理解する為の一例を見出すことが出来る。

ロナガンは、*Method in Theology*において、神学の様々な営みの内に、人間の認識の諸
段階に対応した形で区分され互いに関係しあう八つの専門領野（functional specialties）を
見出す⁴⁷。それは、「歴史」のダイナミズムの中で、一つの宗教の現実（キリスト教の伝
統⁴⁸）と出会い、実存的に関わって行く道筋である。全体は、前半の四つの専門領野、「調
査研究（research）」、「解釈（interpretation）」、「歴史（history）」、「弁証法（dialectic）」
と、後半の四つの専門領野「神学的反省の基礎（foundations）」、「教理（doctrines）」、「組
織神学（systematics）」、「伝達（communications）」の二つに大きく分けられる。

前半の四つの領野を通して、この世界に展開する一つの宗教の現実の認識を深めてい
く。それらは過去から伝承されてきた宗教との出会いのプロセスを導くものとして「媒介
する神学（mediating theology）」と呼ばれる。第一に「調査研究」において、その宗教に
関するデータが集められ（経験のレベル）、第二に「解釈」において、その集められたデー
タの内実が解釈され（理解レベル）、第三に「歴史」において、その内容の真偽が検証さ
れ（判断のレベル）、そして第四に「弁証法」にて、一宗教としての展開において、様々
な異なる立場が生じてくる中で、その現実を研究対象とする者としてどの立場を選び取る
かどうかの識別がなされる（決断のレベル）。

後半に属する四つの領野は、「媒介された神学（mediated theology）」と呼ばれる。そ
れは「媒介する神学」を通して、その宗教の過去から現在に至るまでの歴史的歩みに対峙
し、かつその宗教に参与する決断をした者が、自らの信仰経験を反省し、信仰理解を深
め、未来へとそのダイナミズムを伝えていくプロセスである。第一に「神学的反省の基
礎」は、恵みによる回心、つまり信仰するという「根本的な現実（foundational reality）」
を表現することにより、信仰を反省していく土台を据える役割を担う（決断のレベル）。
第二に、「教理」において、信仰の内実が神的真理として肯定される（判断のレベル）。第
三に、「組織神学」において、個々の教義内容が全体として一貫性のあるものとして理解
する試みがなされる（理解のレベル）。第四に、「伝達」において、理解が深められた信仰
の真理内容を共同体の信仰の場で表現することが課題とされる（経験レベル）。

⁴⁷ ロナガンは、神学における個々の専門領野を、1) データの相違に基づく分野の区別、2) 調査研究の
結果に基づく分類、3) 認識のレベルに従い、互いに段階的に次の領野へと連続的に展開していくと有
機的な全体として捉えている仕方という三つの区別の仕方を提示している。ロナガン自身は三番目の
分化の方法を自らの中心テーマとして展開している。Cf. Lonergan, *Method*, pp.125-126.

⁴⁸ ロナガンは『神学における方法』を論じるに際して、キリスト教の伝統（特にカトリック神学の展開）
を念頭においているが、その枠組み自体は、人間の認識構造をモデルにしている為、他宗教を対象と
することのみならず、あらゆる学問に応用可能であるということを前提としている。

この八つの領野の区別と統一性を認識の構造から捉えるならば、前半の「媒介する神学」は、この世界にあるデータ（一つの宗教の実際の活動）を手がかりとして、その宗教を認識することを目指すゆえに、経験から判断へと向かう「下から」の歩みとして捉えることが出来る。また後半の「媒介された神学」は、一つの宗教の信仰の内容を真理として受け入れることから出発し、その信仰の内実についての反省を目指すゆえに、「上から」の歩みとして捉えることが出来る。

八つの専門領野の内、前半の最後に位置づけられる「弁証法」、後半の最初に位置づけられる「神学的反省の基礎」は、いずれも「決断のレベル」にかかわるである領野であるゆえに、一個人の「倫理的なあり方」本来的な遂行の有無が要となる⁴⁹。特に「弁証法」では、過去から伝えられてきた知的な営みの歴史的なダイナミズムの中で、一個人として価値判断を下すことによって、自分自身の立場を表明することが求められる。それは単に、事実としての「歴史」を認識することを超え、その「歴史」自体に参入すること、「倫理的主体」の在り方を根本的に問われている。

さらに言えば、このような「弁証法」における反省的な知的営みにおいて、また「神学的反省の基礎」における信仰経験の反省においてなされる決断が、知的、道徳的、宗教的「回心」のいずれか、もしくはそのうちの二つないしは全てを経ているかどうかが問題となる。先述の通り、一個人の回心はその人が属する共同体に影響を及ぼす。その意味で特に「価値判断」が要となる専門領野においては、一個人としての回心のみならず、共同体としての「回心」による「共同識別」が重要な役割を持つ。

4. さいごに：「歴史」を倫理的な課題として引き受け伝承していくことへの参与

本稿では、ロナガンの「歴史」理解を、「意味領域」、「進歩・退廃・贖い」からなる歴史の弁証法的ダイナミズムそして「上からのベクトルと下からのベクトルの緊張としての歴史」という三つの観点から概観し、ロナガンがその中で示唆する人間の倫理的ありかたを概観した。

「歴史」理解への取り組みは、ロナガンが生涯持ち続けた研究課題であるが、それは彼にとって単なる学究の対象ではなく、個として（一キリスト者）として、共同体の一員として（カトリック教会そしてイエズス会の一員として）、生き方そのものを問われる「課題」であった。ロナガンは、晩年（1976年）に以下のようなことばを残している。

「現代世界は、次から次へと立ち現れる歴史理論によって支配されてきた。18世紀には、自由主義の進歩理論があらわれ、19世紀には、マルクス主義の弁証法的唯物論があらわれた。私が以前から確信してきたこととは、もしカトリックが、特にイエズス会士が、その時代の水準において生き、はたらかなければならないとするならば、歴史の理論を学ばなければならぬのみならず、自らの歴史理論を作り出さなければならぬということである。道徳律の命法は、禁止事項において豊富で詳細ではあるが、内実については極端に一般的である。しかし、人間を動かすのは善である。善は具体的なものである。しかしキリスト教的な生活において具体的な善であるものは、キリ

⁴⁹ Cf. Lonergan, *Method*, pp.142-143, p.145.

スト教の生き方のダイナミズムを、この世界の中で、それ自身において、自由主義的な進歩とマルクス主義の弁証法とのかかわりのなかで、主題化することによってのみ知られるであろう。…⁵⁰

21世紀において、20世紀のロナガンが見据えた問題をどのように引き継いでいくことができるかという問いが、ロナガン研究者の中で重要な課題となっている。その中で特に、ロナガンの思想の倫理学分野での応用可能性が注目されている。その一例として、近年「神学における方法」を土台に「倫理学における方法」を明確化していく試みがなされている。そこでも注目されるのが「歴史」の位置づけである。これらの研究では、ロナガンと近代の歴史思想との対話に焦点が当てられている。しかしながら、実はロナガンの思想はトマス・アクィナスの思想を土台としている。今後の課題としては、ロナガンの思想をその原点であるトマス・アクィナスにまで立ち返る形で解明し、これを踏まえた上でロナガンにもとづいた「倫理学における方法」の展開が可能であるかを検証していきたい。

(筑波大学大学院人文社会科学部研究科哲学・思想専攻非常勤研究員／
上智大学短期大学部非常勤講師)

⁵⁰ B.Lonergan, "Questionnaire on Philosophy", *Philosophical and Theological Papers, 1965-1980: Collected Works of Bernard Lonergan* (Univ. of Toronto Press, Toronto, 2004), pp.352-383. Cf. Shutte, *The Origins of Lonergan's Notion of The Dialectic of History*, pp.7-8.

Dynamism of Being Ethical In Terms of B. Lonergan's Understanding of Historicity

Eriko SHIMAMURA

Bernard Lonergan is one of the most outstanding Canadian philosopher, Catholic theologian and economist in 20th century. In his major work, *Insight*, he investigates a normative pattern for ongoing and heuristic developments in human understanding. Lonergan sets a “transcendental method” that is the norm of all kinds of human inquiring, including every philosophy, every theology, and every other kind of human knowing. Besides exploring the universal character of human intelligence, Lonergan explores Historicity of human knowing and doing to overcome the crises of modernity in 20th Century.

Lonergan makes a distinction between the history that is written and the history that is written about. In the former “history”, historians interpret the data in order to articulate what happened in the past. The latter “history is the ongoing human reality itself.” In this context, Lonergan thermalizes the historicity of human knowing and doing.

In this article, we focus on the latter “history” to verify how human being can be more fully ethical in the world referring to Lonergan's basic thought. First, Lonergan attempts to identify the trajectory of our way of understanding “history” through differentiating three realms of meaning; common sense, theory and interiority. Then, Lonergan shows us human reality in terms of “a tripolar dialectic of history”, namely, “progress, decline and redemption.” Lonergan also focuses on another dialectical tension between “from below upwards” and “from above downwards” in human historical development and sets up eight functional specialties in method in theology based on this tension. In this basic framework, we will see a possibility of establishing “*method in ethics*”. Through these considerations, I would like to suggest how Lonergan's understanding of human historicity will serve as a heuristic structure of ethical discernment.